

「循環」再ハッケン!

月刊日本館

Issue

08

特集 | Feature

捨てない
哲学





Take Less, Leave None. Use it Again. Wisdom for a Waste-free Tomorrow.

必要なだけ手に取る。残さない。繰り返し使う。
古の知恵と新たな技術に学んで目指す、
「捨てない」のその向こう。

issue 08

No-Waste Philosophy

特集記事



ゴミを出さない町の 「ゼロ・ウェイスト」現場体験記

ゼロ・ウェイストの思想と実践を学びに、〈日本館〉クリエイティブチームのふたりが徳島県上勝町へ。

P.04



「ごみとは何か？」人とのもの 関係性から考えるごみの哲学

人はなぜ捨てられているものを「ごみ」だと思うのか？ ごみはいつ「ごみ」になるのか？ 哲学者の戸谷洋志さんと一緒に考えます。

P.19



ゴミを出さない町の 「ゼロ・ウェイスト」現場体験記



Index

- ・ 一泊二日で使う石鹸の量って、どのくらい? 5
- ・ 「野焼きの町」から、自主リサイクル先進地に..... 12
- ・ 楽しさを入り口に、環境への気づきを広げていく..... 14
- ・ 世界へひろがるゼロ・ウェイストの輪..... 16
- ・ 循環を体現する社会を実現するために 17

880グラム。これは日本で暮らす人が1日に出す廃棄物、つまり「ごみ」の量の平均値です。日本全体だと、1年間でおよそ4,034万トン。東京ドーム108杯分もの量になります（※）。そのうちリサイクルされているのは20%ほど。約80%はごみとして焼却されているそうです。

そんな現状を、より良くするために取り組んでいる自治体のひとつが、徳島県上勝町です。2003年に日本ではじめて「ゼロ・ウェイスト宣言」を発表。その言葉通りごみゼロを目指すというもので、2020年には町としてのリサイクル率80%オーバーを実現しました。そんな町にある複合施設〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター“WHY”〉には、日々町民が自らごみを捨てに訪れ、43種類もの分別を能動的に行うだけでなく、他に類のないユニークな宿泊施設を併設し、建築として、体験として、ごみと人との新しい関わり方を提案しています。

今回、上勝町へ取材に向かったのは、大阪・関西万博〈日本館〉のデザインの領域を担当する色部義昭と、言葉の領域を担当する渡辺潤平のふたり。一泊二日の宿泊体験を通して、上勝町が実践する「ゼロ・ウェイスト」の考え方について、現場で実際に活動している方々のお話を伺いながら、日本館の掲げる「循環」のあり方にヒントを見つけたいと思います。

※) 環境省「一般廃棄物の排出及び処理状況等(令和4年度)について」より。1人1日当たりの家庭系ごみ排出量は496グラム。



一泊二日で使う石鹸の量って、どのくらい？

徳島阿波おどり空港から、車で山道をたどって1時間と少し。〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉は、四国山地の緑に囲まれた場所にあります。家庭や企業から排出されたごみを集積する〈ゴミステーション〉、住民が集まれる〈交流ホール〉、宿泊体験ができる〈HOTEL WHY〉、町民が不要になったものをリユースするための〈くるくるショップ〉などから構成されています。

一般的なホテルとは異なり、チェックイン前にスタッフによる「ゼロ・ウェイストアクション」の宿泊にあたってのガイダンスがあります。今回は、同センターの「チーフ・エンバイロメンタル・オフィサー」(CEO)を務める大塚桃奈さんにご案内いただきました。

大塚 ようこそ、ゼロ・ウェイストセンターへ！まずはお部屋へ向かう前に、滞在中に使う石鹸の量をイメージして、その分だけ切り分けてもらいます。色部さん、1人分の量はどのくらいだと思いますか？

色部 意外と難しい……。1人分だとこんなものかな？

普通に暮らしていると、1日分の固形石鹸の必要量をイメージするような機会は、ほとんどありません。これは「必要な分だけを使う」というゼロ・ウェイストの基礎訓練なのでしょう。続いて大塚さんからふたりに、ごみ分別収集用のバスケットが渡されます。

大塚 ひと晩の宿泊で出るごみ、出がらしの茶葉やティッシュなどすべてのごみを、このバスケットに入れてください。明日、ゴミステーションで分別体験にご参加いただけます。



上段：左から〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉のCEO・大塚桃奈さん、アートディレクター・色部義昭、コピーライター・渡辺潤平。／下段左：1人分を予測しながらスライス。実はこんなに使わないということを翌日思い知らされる。／下段右：〈くるくるショップ〉。ここでは、年に4～5トンにも及ぶ家庭の不用品が新たな持ち主の手に渡って再利用される。

ガイドスを終えて、バスケットをホテルの部屋に持ち帰って思い思いに過ごすふたり。宿泊する〈HOTEL WHY〉は、使われなくなった窓をパッチワーク状にはめ込んだ壁面や、他の宿泊施設などから引き取った家具など、ごみを減らす思想とユニークな発想が共存している興味深い建物です。



バスケットの中の分別用ゴミ箱は6種類。「生ゴミ」「紙類、金属類」「きれいなプラスチック容器包装」「汚れているプラスチック・紙類・木材」「飲料ボトル」「どうしても燃やさなければならないもの」

ウッドデッキに椅子を出して夜風を感じながら、実際に飲む分だけ申告したコーヒーとお茶を丁寧に淹れて楽しむ。自分で出したごみは自分で分別してバスケットに入れることも忘れずに。過剰なものがないからこそ、自然との距離が近く、一つひとつの行為が新鮮に感じられます。

渡辺 ごみを過剰に出さないという意識を持って過ごす、所作もきれいになるような気がしますよね。

色部 普段よりも丁寧に一つひとつの行動をしているという感覚。かといって、窮屈さはなく、むしろすごくおらかな気持ちになるから不思議です。

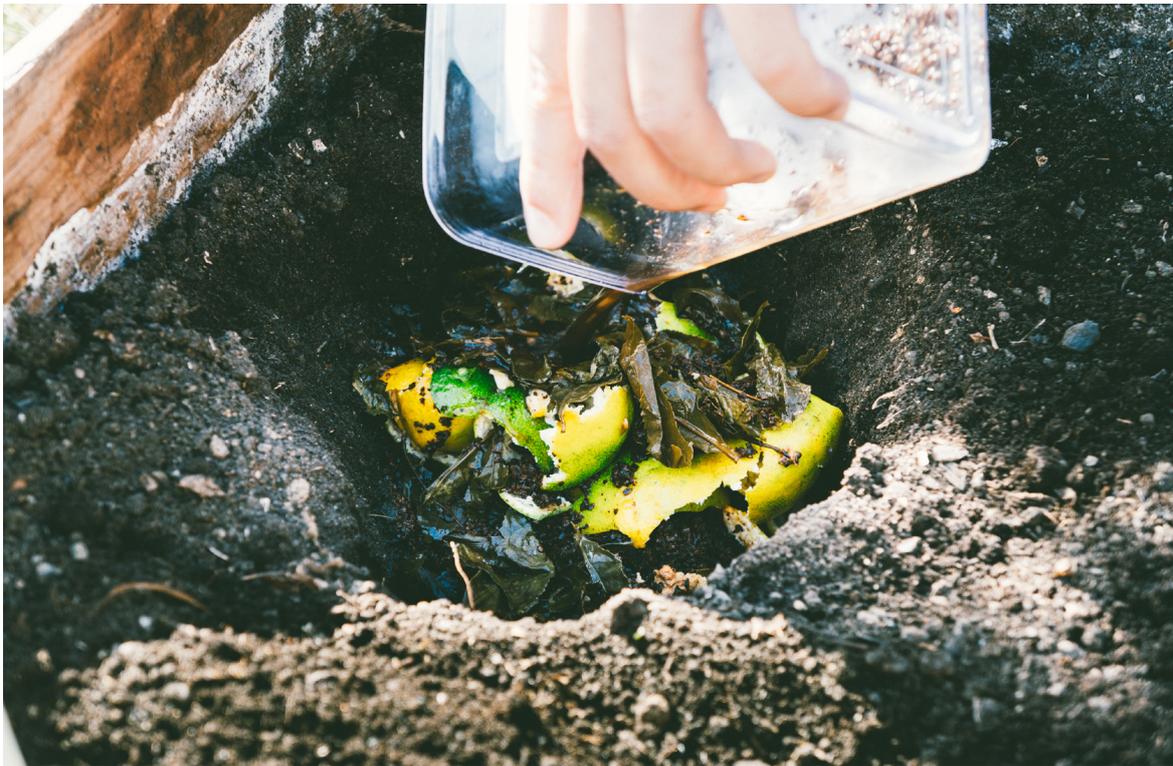
翌朝、近所のお店から届けられた朝食をいただきます。日中は自家製ビールの醸造所を営むお店ですが、この朝食は地元の柑橘類とフィッシュカツに、焼きたてのパン。パンを包む紙袋や柑橘の皮も、あとでゴミステーションで分別します。



柑橘は隣町である勝浦町特産の早生みかん。

朝食を終え、大塚さんと合流したふたりは、庭にあるコンポストのもとへ。スタッフが自作したという木箱に生ごみを入れて土を被せておくと、微生物があっという間に分解してくれるのだそうです。

大塚 箱の中には黒土が入っています。発酵は温かい方がよく進むので、太陽光が入りやすいように蓋は透明に。通気性も大事なので、閉めても密閉されないように傾斜をつけた設計にしています。黒土は6分割してあります。分解を早めるためには、1日ごとに入れる場所を変えるのがポイントですね。比較的分解しやすいものであれば、6日経つとほとんど見えなくなってしまいます。



大きいものや、繊維が硬いものは分解に時間がかかるので、スコップなどで細かく刻みながら入れる。

色部 朝食べた柑橘の皮も、番茶とコーヒーの出がらしも、そんな短時間で分解されて消えるなんて。

大塚 土に空気を触れさせると微生物の働きが活発になるので、定期的に土全体をスコップでかき混ぜることが大事なんです。上勝町では、生ごみだけはゴミステーションで集めず、各家庭のコンポストで処理してもらっています。生ごみは水分を含んでいるので腐りやすく、臭いが出たり、他の紙やプラなどの資源を汚してしまう可能性があるのも、最初から分けているんです。1万円の自己負担で電動コンポストを購入できるよう、町から補助金が出ているんですよ。

渡辺 羨ましい取り組み。動物性タンパク質の生ごみはしっかり分解されるのか不安ですが、一緒に入れていいんでしょうか？

大塚 肉などは同じように入れて大丈夫です。というか、むしろ微生物は好んで分解します。卵の殻や骨、貝殻はなかなか分解されないのも、コンポストには入れないようにしています。

生ごみをすべてコンポストに埋めたら、ゴミステーションへ。手元に残ったごみは、ペットボトル、瓶、紙パック、ティッシュ、お菓子のプラ包装……わずかひと晩ながら、集めてみると意外と多いことに気づかされます。これらのごみが43種類のどの分別に当てはまるのかを大塚さんに教わりながら、それぞれの回収ボックスに収めていきます。



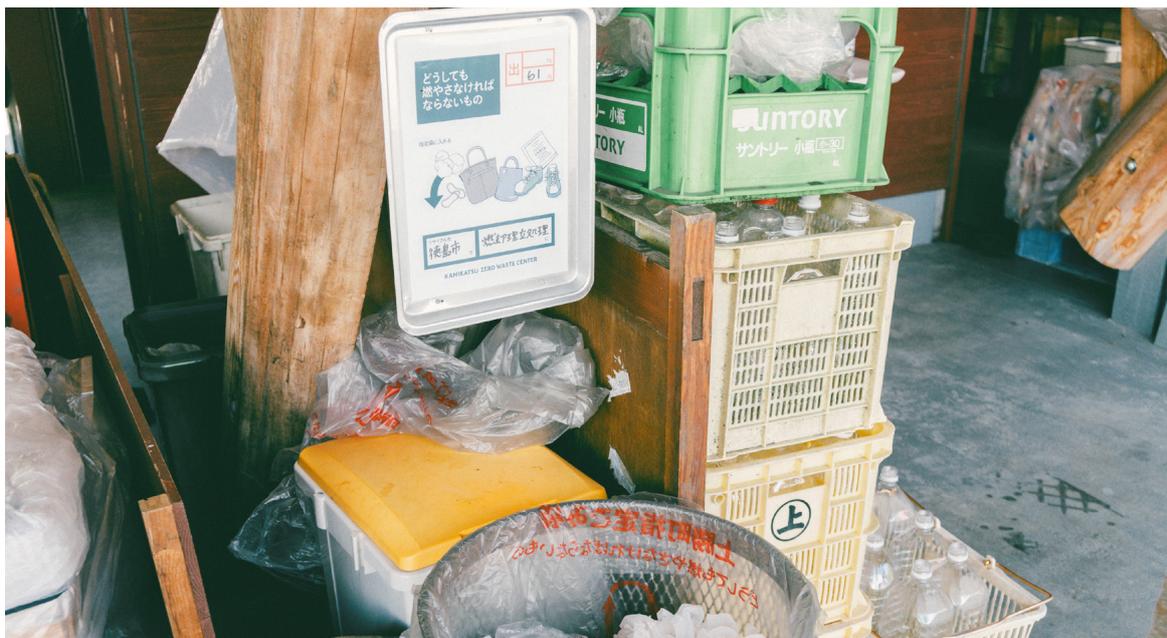
上段：上勝町民が利用する「ゴミステーション」。町内のごみはすべてここに持ち込まれる。／中段左：ジュースの紙パックは再生紙になるので、切り開いて水洗い。町民はこれを洗濯バサミなどで干し、乾かしてからゴミステーションに持ってくる。／中段右：紙は、汚れがついているかによって回収先が異なる。油汚れがついている紙は再生紙にはできないので、固形燃料に。／下段左：搭乗券やレシートなど、感熱紙も油汚れの紙と同様、再生紙にはできない。／下段右：瓶は透明、茶色、そのほかの色に分けられ、色ごとにリサイクルされる。汚れがついていないペットボトルのラベルは、再生できる。プラスチックも汚れがついたものは固形燃料に利用される。

中には、プラスチックや金属が混ざった頑丈なものも……。

大塚 入口付近のテーブルに置かれている、ライターやペン、傘。これらは分解を待っている状態です。できるだけ焼却される量を減らすために、あとでスタッフが分解作業を行います。ちなみに、今までで一番分解しづらかったのはマッサージチェアでした。部品や布がのりできり固定されている箇所が多くて。

渡辺 頑丈であるということはそれだけ分解しづらいということですね。

大塚 上勝町では例えば瓶でも、注ぎ口にプラスチックがついているものは、すべてのパーツを分別して捨てています。ただ、例えばマニキュアのように瓶の中に塗料が入っているものや、水槽のようにガラスとゴムが接着してあるものなど異素材同士がくっついていて分解しにくい場合は、再生することが難しいので焼却・埋立せざるを得ないんです。「どうしても燃やさなければならぬもの・埋め立てなければならぬもの」と書いてあるごみ箱は、いわば“最終手段”。上勝町はリサイクル率80%を達成していますが、裏を返せば20%はまだまだ焼却・埋立に頼っています。ティッシュやマスク、おむつなど、衛生的な理由によってリサイクルできないものや、革製品、塩化ビニルやゴムなど素材として再生ができない製品がここにやってきます。



ゴミステーションを見渡すと、ごみ箱の上にある値段が書かれた看板が目につきます。

大塚 それぞれの看板の右上を見てもらうと、「入」「出」とあり、その横に値段が書かれています。リサイクル業者が買い取ってくれるものは「入」で、横にあるのが1キロあたりの売値。処理するのに町がお金を出さないといけないものは「出」で、1キロ当たりの処分コストが横に記載されています。つまり再生しやすいものの方が、町にお金が入ってくるということですね。例えばアルミは9割が再生可能なので、この中で一番高い「入 160円」と記載されています。

色部 ごみの価値が、具体的な金額で置き換えられると身近に感じられますね。



「野焼きの町」から、自主リサイクル先進地に

今でこそリサイクル率80%を達成している上勝町ですが、30年ほど前まではごみ処理のルールが決まっておらず、山あいに穴を掘って、そこで野焼きが行われていたといいます。その状況から一変、日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」が出され、世界から注目される施設になるまでの道のりを、大塚さんが教えてくれました。

大塚 上勝町では、1997年まで「野焼き」が問題になっていましたが、同年に施行された「容器包装リサイクル法」をきっかけに、プレハブ小屋のゴミステーションを設置しました。当時から住民がごみを持ち寄るスタイルで、9分別からスタートしました。ゴミステーションは「野焼き」が行われていた場所のすぐ隣だったので、住民にとってごみの持ち寄りハードルの高いことではなかったそうです。

翌98年には焼却炉が導入されたのですが、ダイオキシンの問題で2年で閉鎖。人口減少が進んでいた上勝町は、ごみ処理にお金をかけるよりも資源化してごみ自体を減らしていこうという方向に舵を切りました。そこから、町の担当者は、リサイクルについて熱心な調査と住民への説得を続け、2001年には35分別を実現したそうです。

人口の少ない町だからこそ、住民と顔の見えるコミュニケーションを取ることができたんです。当時の笠松町長による改革意識とリーダーシップもかなり大きかったと聞いています。2003年には、アメリカでゼロ・ウェイストの取り組みを行っていたポール・コネット博士が町を訪れています。そして、同年には笠松前町長によって「2020年までに焼却・埋め立て処分をなくすために最善を尽くします」という「ゼロ・ウェイスト宣言」が出されました。そして2005年には、一般社団法人ゼロ・ウェイストアカデミーが立ち上がり、ゴミステーションの運営とゼロ・ウェイスト推進を目的とした住民や町内事業所との丁寧な対話に取り組みました。



2020年、プレハブ小屋だったゴミステーションは〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉に生まれ変わり、〈HOTEL WHY〉が営業を開始。その立役者となった、センターの代表取締役である田中達也さんにもお話を伺います。もともとは徳島市内で衛生事業を営んでいた田中さんは、徳島の人口減少に危機感を覚えていたそう。



〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉創設メンバーで〈RISE & WIN Brewing Co.〉代表の田中達也さん

田中 僕が上勝町のお手伝いをするようになったのは、2011年。笠松前町長から「町おこしに協力してくれないか」と声をかけていただいたのがきっかけです。外部の僕には、35種類の分別や高いリサイクル率は、ものすごい驚きだった。町外にもこの取り組みを伝えようと説得し、ゴミステーションもリニューアルすることになりました。若い人たちがこの町に来なくなる仕組みをつくらないといけないと考え、2015年に自家製ビール醸造所〈RISE & WIN Brewing Co.〉をオープンし、2020年にはゴミステーションを公共複合施設にリニューアルした〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉をスタートするなど、積極的に町の魅力を発信してきました。

以来、〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉は、ごみの課題を扱う場所でありながら、人々を惹きつける魅力を持った場になりつつあります。町民がゼロ・ウェイストの取り組みを自分たちの生活ルーティンに組み込むようになった背景には、もちろん、町長のリーダーシップや役場職員とゴミステーションスタッフの丁寧なコミュニケーションがあったのでしょう。しかし、理由はそれだけではありません。

田中 上勝町は、県内を流れる勝浦川の最上流に位置します。農業にしても排水にしても、この町の人たちは「上流で起きたことは下流に影響する」ことを経験してきて、その意識が根付いているんです。だから自分の出したごみを自分たちで処理する、という考え方がすんなり浸透していったのだと思います。



楽しさを入りに、環境への気づきを広げていく

〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉がスタートして4年。いま、リサイクルを楽しもうという町民発の感性は、丁寧な分別がしっかりと根付いた過疎の町から日本全国の他の地域に伝わり、真剣に循環型社会を作ろうという新たな息吹を生み出しています。

大塚 2030年までに都心の大丸有エリア(大手町・丸の内・有楽町)の廃棄物再資源化率100%を目指している三菱地所さんは、数年前からゼロ・ウェイストのヒントを探しに、我々のセンターに視察にいらっしゃいました。それがきっかけとなり、三菱地所さんでは、商業ビル内での資源循環率の向上を目指すプロジェクトがはじまったんです。私たちは、コンポストの知見の共有や、社内への環境意識啓発のお手伝いをしています。2027年度に開業予定の〈TOKYO TORCH〉街区に位置する常盤橋タワーでは、生ごみを分別して液体肥料を作る機械を導入し、その肥料を使ってまた野菜を育てて食堂やテナントに提供する、という仕組みをつくっているそうです。

田中 最近、三菱地所のビル内で、ゴミ箱の「燃えるごみ」の表記を「燃やさないといけないごみ」に変えたところ、立ち止まって考える人が増えて、分別率が上がったそうなんです。また、ごみの集積所も明るくペイントし直したところ、分別への意識が高まったと聞いています。ちょっとしたことで人の意識の変化が起きるんですね。



町の成り立ちや生活者の意識。そして人々の行動を変えるクリエイティブ。様々な条件が重なり合って、センターは分別とリサイクルの新たな価値を内外に発信する場になりました。色部さん、渡辺さんはどう捉えたのでしょうか。

色部 ごみを出したあとのことだけではなく、消費することについて意識することが必要ですよ。江戸時代の日本では、使用済みのあらゆるものを回収してリサイクルする人たちがいました。ドイツでは「ものを買うときは必ず同じ分だけ手放す」と子どもの頃から教わると言います。「ものを持ちすぎない」とか、「簡単に捨てない」という価値観を伝える場があると、意識を変えていけると思います。この思想は、日本館が掲げる循環のテーマに地続きのもので、まさに循環を体現している場所だと感じました。

渡辺 「ハチドリの一としづく」という話があります。山火事が起きて、ハチドリが一所懸命口に含んだ水を吹きかけて火を消そうとする。その様子を見てほかの動物は笑うのですが、ハチドリは自分ができることをやり続ける。環境問題も同じで、上勝町の事例を一つの特異なケースとして扱うのではなく、このアイデアや仕組みを発展させて、社会全体で取り組んでいくべき。ゼロ・ウェイストが当たり前の世の中が来るように、一人ひとりが行動していくことが必要なんだと改めて思いました。あと、最初はちょっと緊張したというか、背筋が伸びる感覚があったんですけど、宿泊してみてもとにかく楽しかったです。関わった人がみんな温かくて、食事も美味しく、純粋に素晴らしい体験でした。

色部 僕は、建築に感銘を受けました。少しでもごみを減らそうという思想がデザインに生きていて、他にはないユニークなアイデアがたくさん。

渡辺 楽しさや美しさから入って、環境への意識が変わっていく。それもまた素晴らしい価値ですよ。

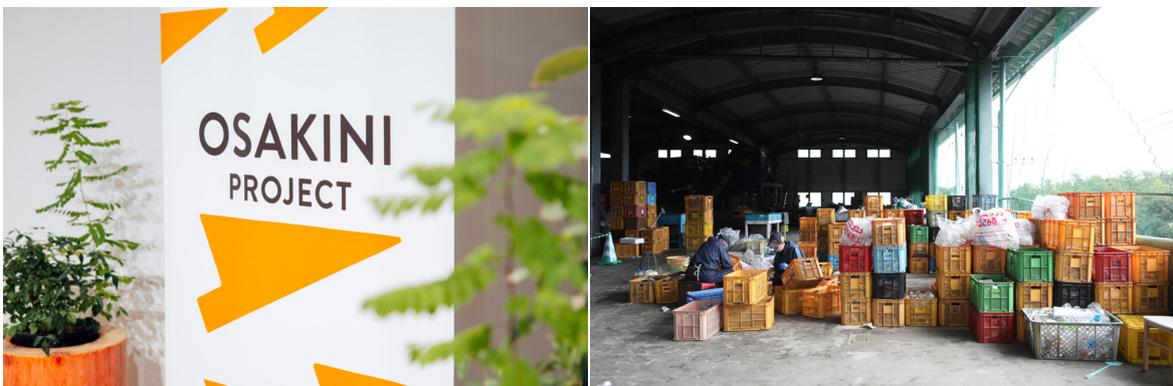
色部 日本館だけではなく、様々な仕事を通して、環境への意識を変えるきっかけとなるような仕組みを作っていくべきだと思います。



世界へひろがるゼロ・ウェイストの輪

ゼロ・ウェイストを目指した活動をしている自治体は、上勝町だけではありません。

例えば、鹿児島県の大崎町は、リサイクル率日本一を誇ります。1998年まではごみはすべて埋め立てられていましたが、数年で埋立処分場が満杯になってしまうという強い危機感から町はごみの分別回収に取り組み、2006年にはリサイクル率80%を達成。現在もその数値を維持しています。住民・企業・行政の協力体制によって廃棄物の減量化に成功した「大崎リサイクルシステム」は海外からも注目され、今では、インドネシアへの技術移転も行われているそうです。



左：大崎町が推進してきた「大崎リサイクルシステム」を土台に、循環の考え方を世界に広めるべくはじまった「OSAKINI PROJECT」。リサイクル事業のみならず、企業と協業した商品開発や空き家活用なども行っている。（写真提供：一般社団法人大崎町SDGs推進協議会）／右：ごみは27種類に分別される。内17%は一般ごみ、23%は資源ごみ、60%は生ごみ・草木。資源ごみはリサイクルされ、生ごみ・草木は堆肥化されるため、埋め立てられるのは17%にとどまっている。（写真提供：一般社団法人大崎町SDGs推進協議会）

自治体だけでなく、大企業も率先して新たな取組をはじめています。大塚さん、田中さんが話してくれた三菱地所との活動もその一つ。「サーキュラーシティ丸の内」というプロジェクトは、2030年までに大丸有エリアにおいて、廃棄物再利用率100%達成を目指しています。〈上勝町ゼロ・ウェイストセンター〉の視察をきっかけに、生ごみの肥料化の知見共有や社内の環境意識啓発において同センターと協力を結んでいます。さらには、同社が管理する大規模オフィスビル24棟でペットボトルの回収を徹底するとともに、廃食用油を回収し、それを持続可能な航空燃料であるSAF (Sustainable Aviation Fuel) へ再利用する取り組みなどもはじまっています。



左：三菱地所が運営管理するビルのごみ集積所。明るく塗り直したことにより、利用者の分別意識が高まった。(写真提供・設計・施工：株式会社メック・デザイン・インターナショナル)／右上：大手町・常盤橋タワーのコンポスト。施設から出る生ごみを液肥にし、近郊農地でその液肥を活用した農作物を育て、収穫された農作物を常盤橋タワーや三菱地所の社員食堂で提供している。(写真提供：三菱地所)／右下：常盤橋タワーのコンポストでできた液肥を使い、農作物を育てている。(写真提供：三菱地所)

循環を体現する社会を実現するために

様々な立場の人が関わり合いながら、社会全体の共通善を実現するために、未来へ向けてともに歩んでいく。こうした価値を支える生活者の意識は、どうすれば社会全体で生まれ、伝承されていくのでしょうか。

上勝町の掲げる「ゼロ・ウェイスト」の価値観は、日本館が掲げる「循環」のテーマに連なっています。一人ひとりの生活者がごみを減らすことに楽しさや美しさを感じる。その習慣とアイデアやクリエイティビティが結びつき、人々を惹きつける取り組みへと進化すること。その取り組みを行政が意思を持って仕組み化すること。そして、さらに大きな社会全体のグランドデザインへと姿を変え、生活者の暮らし向上へと還元されてゆく。

これからもっと広がっていくであろう「ゼロ・ウェイスト」と「循環」の社会実装の主役は、一人ひとりの力なのです。



おおつかももな
大塚桃奈

1997年生まれ。「トビタテ!留学 JAPAN」のファッション留学で渡英したことをきっかけに、服を取り巻く社会問題に疑問を持ち、長くつづく服作りとは何か見つめ直すようになる。2020年国際基督教大学卒業後、徳島県上勝町へ移住し、5月にオープンした「上勝町ゼロ・ウェイストセンター WHY」に就職。Chief Environmental Officerを務め、循環型社会の実現を目指し、ごみを切り口に日々対話を重ねている。



たなかたつや
田中達也

1969年生まれ。徳島市出身。検査・分析を通して食の安全安心をサポートするスペック・バイオラボラトリー代表。地域の課題解決をテーマとした事業に関わったことがきっかけで、徳島・上勝町の活動に携わる。2015年、町が取り組む環境活動「ゼロ・ウェイスト」をわかりやすく理解するための取り組みとして、クラフトビールの醸造所「RISE&WIN Brewing Co. BBQ&General Store」を創立。2020年開業の公共複合施設「上勝町ゼロ・ウェイストセンター(WHY)」の立ち上げに携わる。同施設を運営する株式会社BIG EYE COMPANYの代表を兼務。



アートディレクター／グラフィックデザイナー
いろべよしあき
色部義昭

株式会社日本デザインセンターにて色部デザイン研究所を主宰。グラフィックデザインをベースに平面から立体、空間、映像まで幅広くデザインを展開。AGI(国際グラフィック連盟)メンバー、日本デザインコミッティー理事、東京ADC会員、JAGDA会員。東京藝術大学非常勤講師。主な仕事にOsaka Metro、国立公園などのVIデザイン、市原湖畔美術館、東京都現代美術館などの公共施設のサイン計画、Sony Park展などの展覧会のグラフィックデザインなどがある。2025年大阪関西万博では日本政府館のアートディレクションを担当。主な受賞歴に亀倉雄策賞、ADC賞、SDAサインデザイン大賞(経済産業大臣賞)、One Show Design ゴールドペンシルなどがある。



コピーライター
わたなべじゅんぺい
渡辺潤平

1977年千葉県船橋市生まれ。早稲田大学卒業後、2000年に(株)博報堂入社。2007年に(株)渡辺潤平社設立。広告キャンペーンの企画立案のみならず、コーポレートスローガンの策定や商品・企業のネーミング、作詞など、言葉を中心としたコミュニケーションを幅広く手掛ける。カンヌ国際広告祭、ACC賞、TCC新人賞、日経広告賞、ギャラクシー賞など受賞。山梨県北杜市にて書店「のほほん BOOKS&COFFEE」を経営している。



「ごみとは何か？」人とももの 関係性から考えるごみの哲学



Index

- ・なぜつぶれた空き缶を「ごみ」だと思うのか?..... 21
- ・忘れ物は「ごみ」なのか?.....22
- ・美しいのに、ごみ?.....23
- ・なぜ「なんとなく捨てられない」のか?.....25
- ・「思い出の品」が捨てられないのは、儚さへの抵抗?.....26
- ・ごみのない世界に、他者は存在しない?.....27

「ごみ」とは不思議なものです。ずっと愛用していたTシャツでも、まだまだ使える道具であっても、いらなくなった途端に心の中のごみ箱に捨てられてしまいます。その一方で、自分には不要なものでも、誰かにとって価値のあるものはたくさんあります。では、「ごみ」とは一体何なのでしょう。

この問いかけの答えを見つけるため、砂浜に捨てられている雑貨や漂着物を拾い集めるフィールドワークを行いました。集めたものを分類してみると、「ごみである」と判別するには、ものの機能や価値、個人の価値観といったさまざまな要因が関わってくるのではないかという考えが浮かんできたのです。

そこで、哲学者の戸谷洋志さんを訪ね、砂浜で拾い集めたさまざまなものと、自宅にあった「ごみ」かどうか判断できないものを一緒に眺めながら、お話を伺いました。

ごみはいつ生まれる？ 人間にとって、ごみとは何か？ そして、それは本当にごみなのか？ 一緒に考えてみましょう。

——何をごみと感ずるかって人それぞれですよ。その曖昧な「ごみ」について戸谷さんと一緒に考えていきたいと思ひます。そもそも「ごみ」という概念を哲学的に考えてきた人っているのですか？

戸谷 「ごみ」そのものを主要概念として哲学で論じている人は思ひ浮かびませんね。

一つの切り口ですが、ごみは大きく2つに分けて考えることができます。ひとつは食べ物のように放っておくと腐敗して形がなくなってしまう、いわば自然に還るもの。もうひとつはプラスチックのように自然環境下で分解されにくいもの。

後者の「自然の循環に逆らうごみ」は18世紀後半の産業革命以降に生まれた比較的新しい概念で、哲学においては主題として扱われてきませんでした。というのも、哲学の分野ではいかに自然の中に存在するものを獲得し、使用できるものにするかという「所有」や「生産」に議論の重点が置かれてきたからです。

現代の私たちが考えるごみは、前述の2種類が混ぜ合わさったもので、比較的新しい概念といえるでしょう。



なぜつぶれた空き缶を「ごみ」だと思ふのか？

——今回の取材のために、海岸に落ちている「ごみ」と思われるものを拾い集めてきました。これは砂浜に落ちていた空き缶。誰がどう見てもごみだと思ふようなものですが、なぜ、大半の人は、疑いもなく「ごみ」だと認識してしまうのでしょうか？

戸谷 この空き缶はビールを飲むための道具ですよ。缶そのものに価値があるのではなく、ビールを飲むことができる機能に価値がある。つまりビールを飲むという行為や、喉を潤すという目的とのネットワークの中で役割を果たせるかどうかで、ごみかどうかを判断することができるでしょう。

この空き缶は機能をなくし、ネットワークから外れているので、役に立たないものになっています。だから、この状態の缶はごみだといえるんじゃないでしょうか。

——たしかに、本来の機能を失っていますね。

戸谷 でも、これが本当にネットワークから外れているかって、実はわからないんですよ。もしかしたら海にやってきた人が何らかの目印として缶を置いていたのかもしれませんが。そうだとしたらこの缶は道具として別の機能と目的を果たしているのです、ごみではないですよ。

——うーん、たしかに。そう考えると、見た目だけで判断することはできませんね。

戸谷 一方で、この缶を捨てた人は、これを見た人が「これはごみだ」と判断することを見越してつぶした可能性もあります。

—— どういうことでしょうか？

戸谷 この缶を捨てるだけならば、わざわざつぶす必要はないですね。にもかかわらず「つぶす」という行為を取り、機能を失わせ、社会の中でごみとして認められやすい状態に変化させている。

言うなれば、ごみらしい姿にすることである種の刻印をつけ、捨てることを正当化させていると考えることもできる。機能が損なわれているからごみになっているのではなく、ごみにするために機能を損なわせているということです。

——なるほど、たしかに紙ごみを捨てる前にくしゃくしゃにつぶすことがあります。そうした行為も同様かもしれません。



忘れ物は「ごみ」なのか？

——では、このような2種類のサンダルケースはどうでしょう？

同じサンダルでも、片方だけのものを見れば、直感的に「ごみ」だと感じるのではないのでしょうか。でも、左右がそろっている対のサンダルが揃っているもの場合は見れば、もしかして「忘れ物」なんじゃないかという気がして、「これはごみなのだろうか？」と迷うのではないかと思うのです。機能を持っているかで判断すると、片方だけのものは「ごみ」、左右がそろっているものは「ごみ」ではないということでしょうか？



戸谷 ごみって、もともとは誰かの所有物だったものですよ。これらのサンダルで問題なのは、所有者にとってまだ必要なものなのか、それとももう不要になったものなのかという点です。つまり、このサンダルが砂浜に置き去りにされた状態でもなお所有者に求められ、ネットワークの一部を成しているかが判断の分かれ道になるということです。

——海辺で実際に所有者が所有権を主張するかどうかはさておき、あくまで思考実験という前提に立ちましょう。空き缶と同様に、ネットワークの一部であればごみではなく、ネットワークから外れてしまえばごみである、ということですか？

戸谷 その通りです。ただ、忘れ物であったとして、このサンダルがなくても生活が成り立っていたらどうでしょう。所有者はサンダルを忘れたことすらも忘れてしまっていて、生活を送っている。でも、サンダルを見て「あ！ そういえばサンダルのこと忘れてた。なんか不便だと思っていたんだよね」と感じたら、この場合はごみではありませんよね。

一方、サンダルなしの生活に満足していて、このサンダルを見ても「別になくてもよかったな」と感じるのであれば、置き忘れた時点でこのサンダルはごみだった可能性があります。

——たしかに、持ち主の道具のネットワークからそもそも外れていたということですからね。

戸谷 何らかの形で所有権が放棄され、誰のものでもないものになると「ごみ」になる可能性は高いかもしれませんね。もともと自然に存在したものとは違い、ごみは、もともと誰かの所有物だったというプロセスがあります。逆にいえば道具をごみにするということは、道具にある種の公共性をもたらすことなのかもしれません。

——「公共性」ということで言えば、実際のごみは、たいていの場合、廃棄物として行政が処理することになります。そのコストは税金で負担されるでしょうから、どこまでのものを「ごみ」と見なすかという論点は、社会の中のコスト分担の問題とも絡んで、法律的には違った側面が出てくるかもしれませんね。本人が有用だと言い張っても、客観的にごみという場面もあるだろうし、行政がごみだと認識しても本人の主観ではそうではない、といったケースも出てくるでしょうから。



美しいのに、ごみ？



——次に、自然物について伺わせてください。この流木はどうでしょうか？流木のような「機能のない自然物」を売っている人もいますよね。

戸谷 拾った流木は元来誰かの所有物だったわけではないですよね。人間のネットワークではなく、自然界のネットワークに置かれ続けていた存在です。そう考えると、流木はそもそも人間に対してではなく、地球や環境に対して機能を持っている。そう考えるとごみではないですよ。

ただ、単なる鉱物である宝石が人間世界でものすごい価値を持つように、自然物が人間世界のネットワークに置かれることで価値が発生するということもあります。

——どうしたら、もともと自然物だった流木に価値が生まれるのでしょうか？

戸谷 流木自体に価値があるかは別に、流木に労力をかけることで価値が生まれる場合があります。ジョン・ロックという哲学者は、所有や価値の生まれる源泉は人間の労働力にあると説いているんですよ。

——労働力、ですか。

戸谷 たとえば、りんごをもぎ取るとか、流木を拾い上げるとか、ロックの言葉を借りると「労働力が自然物と合わさる」ことで、自然物が所有物になり、価値を持つようになる。だから、流木を価値のあるものとして人々が受け入れることができるのは、そこに人間の労働が関与しているからだと思います。

——逆に言うと、人間が自然物に勝手に価値をつけているということですよ。一度価値をつけたとしても「価値がなくなった」と感じたならば、流木もごみになるということですか？

戸谷 そうですね。流木は人間の築いたネットワークの中に置かれると、自然界での役割を失います。一度価値をつけたものでも、結果的にごみになるということは考えられるでしょう。そう考えると、流木をごみにしているのはあくまでも人間だということになりますね。



——こちら流木ですが、どこか力強い雰囲気があるなと感じて拾ってしまいました。そして次の石の組み合わせは、形が美しいなと。海に落ちているものに美しさを感じて拾い集めている人もいますが、美しいと感じることと、ごみと感じるかどうかには関連があるのでしょうか？

戸谷 難しい質問ですね。使用可能な道具をごみの対極と考えるならば、必ずしも美とは関係しないと思います。つまり「美しいごみ」ということがありえる。たとえば、ごみの日にみんなが出したごみ袋の積み方を美しく感じたとしても、それはごみですよ。

——先ほどの「ごみ」は主観的な判断だけで決まるのか、行政が勝手にごみと決めていいのか、といった論点とも関連しますね。

戸谷 ただ、その美しさを別の目的に使用できるのであれば、ごみじゃない可能性はあります。

——美しさを別の目的に使用する。それってどういうことですか？

戸谷 流木を誰かがぼいっと捨てたのならその時点でごみとなり、捨てられた流木が誰かにとって美しく映っても依然としてごみだと思うんです。

ただ、これを拾い上げて「美しいから他のものと交換できる」とか「美しいから部屋に飾ったら気分が良くなるだろう」などと何らかの目的を持って使用した瞬間に、それはごみではなくなります。

さらに、流木を拾い、夕陽にかざしてその陰影を眺めるという“労働”を行ったならば自分の所有物だと思うかもしれないですね。つまり、流木を用いて陰影を眺めるための労働のように、美しいものや体験を獲得するために働きかけることで、それがごみではなくなる可能性はありますね。



なぜ「なんとなく捨てられない」のか？



——ここからは、家の中にあるものを取り上げてみたいと思います。砂浜で拾ったものとは違って、所有物ではあるのですが、捨てていないだけでいらぬものってたくさんあると思ったんです。これはスマホの空き箱なのですが、なんとなく捨てられなくて保管していたものです。この「なんとなく捨てられない」という気持ちが生まれるのはなぜなのでしょう？

戸谷 箱や袋って特別なんですよ。ガストン・バシュラールというフランスの思想家が、「小箱は外と内を隔てることによって、内部に価値を生み出す機能を持っている」と説いています。

たとえば、何かを箱に入れたり包装したりするだけで価値が生まれたように感じられませんか。つまり、中身ではなく、箱が何らかの価値を生み出している。だから、この箱を捨ててしまうと、箱の中にあったものの価値まで相対的にやや減ってしまう気がするため捨てられないんじゃないでしょうか。また、箱とは関係なく、ものを捨てられないという傾向を持った人もいると思います。

哲学者のハンナ・アーレントは「現代社会において人間は所有物をなんでもかんでもお金に換算して、ものを交換価値で捉えているけど、もともと所有物ってそういうものじゃなかったよね？」という話をしているんです。

——インターネットで私物を売ることが当たり前になってきていますが、ものを市場において交換することで実現する価値として認識する傾向は強くなっていそうですね。

戸谷 そうですね。アーレントは「私が生まれてくる前から存在していて、なおかつ私が死んだあともこの世界に残ることを期待できるものが所有物や財産なんだ」と言っています。スマホは生活の循環の中でいつかは機能を失う。つまり消えていくものです。一方、たとえば家や宝石といったものは自分が生まれてくる前から存在していて、私が死んだあともこの世界に残り続けていくという期待が持てますよね。

人間は誰もいつかこの世から去っていく儂い存在です。でも、所有物はその儂さに抵抗するもの。いらなくなったからすぐ捨てるということを繰り返すのは、その抵抗力を失っているともいえる。自分の所有物を簡単には手放すことができないのは、自分のある種の儂さに抵抗したいという気持ちがどこかにあるからだと思います。



「思い出の品」が捨てられないのは、儂さへの抵抗？

——そういうことであれば、このロウソクはたしかに儂さに抵抗するために残しているものかもしれませんが。これは5歳を迎えた息子の誕生日にケーキに飾って使用したもので、捨てられずに取ってあります。思い出の詰まったものはなかなか捨てられずにいるのですが、持ち主の個人的な思い出や感情と「もの」との間にはどんな関係があるのでしょうか？



戸谷 大量生産・大量消費が当たり前の現代社会において、人間は急速なライフスタイルを強いられ続けていますよね。今現在使っているものさえも、間もなくごみになる。そして、それがごみになったら新しいものを手に取り、また手放す。つまり、とても儚い循環の中にいるんです。

ただ、ひとりの人間は循環するものではなくて、はじまりから終わりへと向かう物語を生きている。つまり、ものの循環が「円環」だとすると、人生は「直線」なんです。

そして、人間は絶え間ない「ものの循環」にさらされながらも、その循環の中で、抵抗するように「直線的な人生」を記録したいと願う。お子さんの5歳の誕生日は、二度と繰り返さない。二度と繰り返されない時間を積み重ねながら人間は生きていくのです。

このロウソクは、絶え間なく循環していく生活の中でお子さんの人生の物語を記録するために残されているものですよ。私は、それはごみではないと思います。



ごみのない世界に、他者は存在しない？

——お話を伺って、「ごみとは〇〇だ」と簡単には結論づけられないものだと感じました。

戸谷 今の社会は、ごみがまったく存在しない都市空間を理想としているようにも感じられます。私たちが思うがままに世界を設計できるデジタルツイン（デジタル上で複製された空間）やメタバース（インターネット上の仮想空間）には、ごみが基本的に存在しないんですよ。現実世界には普通にごみがあるにもかかわらず、自分たちがつくり出す仮想世界からはごみを排除しているのです。

僕は、ごみが存在しない空間にはリアリティは感じられないと思います。道具のネットワークから外れるとごみになるという話をしましたが、これはマルティン・ハイデッガーという哲学者の考え方なんです。ハイデッガーは、「世界は道具の連関で成り立っていて、正常に機能していると道具の存在を意識できない」と言っています。

—— どういうことでしょうか？

戸谷 たえば、ペンで何かを書いている時にペンの存在は意識しませんよね。でも、ペンが急に書けなくなったら、そこではじめて「あれ？」と、その存在を意識する。つまり、何かが機能を失うことで、道具がどんなネットワークに置かれているかに気づく場合があります。

—— ごみが存在しない世界とは、自分がどんなネットワークにいるのかを意識しにくくなる世界でもあるということですね。

戸谷 ビール缶をつぶしたごみを拾ったことで「ビールを飲んでいた誰か」の存在を感じたように、ごみも人間のネットワークの一部です。この世界には多様な人々がそれぞれのネットワークを形成しながら生きているということを、ごみを介して知ることができます。

—— インターネットのデジタル空間が、人間のネットワーク形成の新たな進化だとするならば、他者の存在が醸し出す痕跡やぬくもりのようなものをどう再現することができるか、ごみのような存在をいかに設定するか、という点が人間の社会性を維持する上で大事になるということかもしれませんね。ただ、リアル空間でもデジタル空間でもよすがとなる「もの」がなくなってしまうのは切ないですね。

戸谷 ごみが存在しない社会というのは、他者の存在が想像できない社会ですよ。私が育った家の近くに貝塚があるんですよ。貝塚は古来の人たちがそこで貝を食べて貝を捨てていったごみなわけですけど、ごみがあることによってここがかつて人々が生活していたということがわかるという側面もあって。しかも数万年前の人間ですよ。絶対に会話なんかできないような存在なのに、その人の存在を感じられるっていうのはある意味では奇跡的なことでもありますよね。だから、そういうものとしてのごみの価値は、使用する価値とは別のところにあるのかなとも思います。

—— たとえ本来の使用価値を失ったとしても、そこに他者の存在を感じられるのであれば、ごみには別の機能が生まれうるということなのかもしれませんね。



立命館大学大学院 先端総合学術研究科准教授

とやひろし
戸谷洋志

1988年東京都生まれ。法政大学文学部哲学科卒業後、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は哲学・倫理学。ドイツ現代思想研究に起点を置いて、社会におけるテクノロジーをめぐる倫理のあり方を探求する傍ら、「哲学カフェ」の実践などを通じて、社会に開かれた対話の場を提案している。著書に『ハンス・ヨナスの哲学』（角川ソフィア文庫）、『ハンス・ヨナス 未来への責任』（慶應義塾大学出版会）、『SNSの哲学リアルとオンラインのあいだ』（創元社）、『親ガチャの哲学』（新潮新書）『恋愛の哲学』（晶文社）など。2015年「原子力をめぐる哲学——ドイツ現代思想を中心に」で第31回暁烏敏賞受賞。
